法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-12

研究アプローチ活動報告

TANAKA, Yuko / OGUCHI, Masashi / ABIKO, Shin / WANG, Min / KREINER, Josef / 田中, 優子 / クライナー, ヨーゼフ / 王, 敏 / 安孫子, 信 / 小口, 雅史

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学
(巻 / Volume)
10
(開始ページ / Start Page)
189
(終了ページ / End Page)
236
(発行年 / Year)
2013-03-29

研究アプローチ活動報告

研究アプローチ① 田中　優子 … 189
研究アプローチ② ヨーゼフ・クライナー … 200
研究アプローチ③ 王　　敏 … 207
研究アプローチ④ 安孫子　信 … 222
電子図書館の構築 小口　雅史 … 233

研究アプローチ①「＜日本意識＞の変遷－古代から近世へ」

アプローチ・リーダー：田中　優子

メンバー

2011 年度の研究アプローチ①「＜日本意識＞の変遷－古代から近世へ」は、昨年度のメンバーに鈴村裕輔（国際日本学研究所客員学術研究員　比較文化・比較思想）を加えて構成した。なお国際日本学インスティテュートのポストドクター（リサーチアシスタントならびに国際日本学研究所客員学術研究員）と博士後期課程の学生（国際日本学研究所学術研究員）も、昨年度同様、研究メンバーとして様々な補助と研究に携わってもらうことになった。

打ち合わせ会議

2011 年度の打ち合わせ会議は「第 4 回研究会」として、5 月 21 日（土）におこなった。2010 年度の研究活動は、研究会が 2 回、シンポジウムが 1 回、特別講演会が 1 回、映画上映会が 1 回行われたほか、フルテキストデータベースを活用することで、大学院博士後期課程の学生が特定の言葉を各自の専門領域で検索するようになり、すでに複数の研究論文が成果としてまとめられている。それを受けて 2011 年度は、「国難と日本意識」という新たな研究の課題が提起された。2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災後に日本列島に住む人々の間に起きた「震災を国難として捉える」という姿勢が、「日本意識」の研究対象のひとつとして適切であるとともに、日常の生活で起きている事柄に絶えず注目し、社会と積極的に関わり、社会に研究成果を還元することが、とりわけ「日本意識研究」には重要であることが確認された。その際、「国難の研究」ではなく、比較研究の対象として「国難」を扱うこと、「戦争によってもたらされる国難」と「災害によってもたらされる国難」の区別、「為政者レベルでの国難への対応」だけでなく「民衆レベルでの国難への対応」、「日本では中世までは民衆が持つ情報の絶対量が少ないこと」、「誰にとっての国難か」という点を踏まえることで意見が一致した。想定される研究の項目として挙げられたのは、「蒙古襲来と朝鮮出兵の対比」、「天明の浅間山噴火に関する当時の随筆の内容の比較検討」、「安政の大地震に対する『被災地域外に住む人々』

の反応」、「関東大震災と東日本大震災の対比」などであった。

なお、今年度も、昨年度に引き続き、大学院博士後期課程在籍者による研究発表を奨励するとともに、必要に応じて大学院修士課程在籍者にも発表の機会を提供することが確認された。

研究会

・第 3 回研究会

2010 年度は「研究会」と位置づけた催しが 2 回であったので、2011 年度研究会の初回は第 3 回研究会となる。第 3 回研究会は「民俗と信仰」をテーマに、2011 年 4 月 2 日（土）に開催された。報告者は国際日本学インスティテュート博士後期課程在学中で国際日本学研究所学術研究員でもある内原英聡（日本学術振興会特別研究員、沖縄文化研究所奨励研究員）と、高山秀嗣（二松学舎大学非常勤講師）である。

内原英聡『＜風水＞と＜祭祀＞にみる自治と連の変遷～八重山諸島を軸として～』では、近世琉球弧の村落社会を構築する上で欠かすことのできない要素である「風水」と「祭祀」について報告がされた。風水は科学的な「地理の法」として活用された。この思想と技術は紀元前の中国で生まれ、10 世紀には東アジア全般に普及した。琉球国でも 14 世紀以前には風水が導入されていたと推測されている。一方、祭りは生活を通じて得られる衣・食・住の「象徴」であり、死者と生者、あるいは「あの世」と「この世」をつなぐ「時」であり、あるいは、生命の循環を願う「場」として機能した。琉球弧のシマ社会に深く浸透した風水思想、および神々への信仰の基底には、人々を取り囲む「自然」への配慮と、畏敬の念が横たわっていた。

高山秀嗣『近代仏教者と「日本」―浄土真宗の視点から―』では、「海外布教」を取り上げた。特に浄土真宗（特に東西本願寺教団）を対象とし、小栗栖香頂・曜日蒼龍・大谷光瑞に焦点を当てた。香頂と中国、蒼龍とハワイ、光瑞とアジアなど、関わった国や地域で、おのおのの独自性を発揮している。それぞれの布教スタイルを「香頂：回帰型」・「蒼龍：移民型」・「光瑞：教化型」と仮に名づけた。さらに、明治 10 年代初頭の香頂の中国布教、明治 20 年代初めの蒼龍のハワイ布教、明治 30 年代以降に本格的に着手された光瑞のアジア布教の具

体的内容についても言及した。この海外布教の事例を通して、近代における「国家と宗教」の問題を視野に入れることができた。

・第 4 回研究会は、「打ち合わせ会議」の項目で、すでに記述した。

・第 5 回研究会

2011 年 6 月 25 日（土）に第 4 回研究会は、大屋多詠子（青山学院大学文学部准教授）による『曲亭馬琴と日本意識』の報告であった。本発表では、曲亭馬琴の「やまとだましい」という言葉に着目した。馬琴はそれを、忠孝あるいは潔く揺るぐことのない心持ちとして使っている。本居宣長や水戸学からの影響が見られるが、忠孝と捉える点は、垂加神道で尊王を説いた唐崎士愛に近い。馬琴は王室を尊ぶ一方で、和漢兼学を目指し、かつ客観的に歴史を批評しようとする立場を貫き、天皇批判をも行っていることが確認できる。馬琴の「尊王思想」とは、現実の水戸学や尊王運動と直接交わることのない次元のものであったのであり、それは馬琴の「日本魂」という語の使用例からも再確認できる。馬琴の「尊王思想」は、むしろ歴史を俯瞰した上で歴史批評という立場からの「尊王思想」と言うべきものであったのであろう。当日の議論では、「やまと」の魂を、儒教道徳である忠孝と捉えたことについて質疑討論がおこなわれた。

・第 6 回研究会

2011 年 10 月 15 日（土）の第 5 回研究会は、マートライ・ティタニラ（早稲田大学演劇博物館研究員）による『映画の中の日本』の報告であった。まず新藤兼人の監督作品『藪の中の黒猫』（1968 年）が上映された。『藪の中の黒猫』は平安時代中頃を舞台に、武士が惨殺される事件を追う映画である。この映画における文学的･演劇的･映画的な要素の受容、新藤兼人の独自性といった点について分析が行われ、『今昔物語』『平家物語』『太平記』『御伽草子』『大江山絵詞』歌舞伎『茨木』などの内容が取り入れられていることが示された。また、主演の中村吉右衛門による歌舞伎俳優の身体、ミカド役の観世栄夫よる能役者の身体、舞台照明の方法、能舞台の構造、歌舞伎の般若隈や宙乗り、宙返りといった軽業など、日本演劇の様々な方法が駆使されていることが明らかにされ、同時に新藤兼人の独自性が明確になった。マートライ氏の取り組みは、映画という映像芸術を通した日本意識の解明にも寄与するものであっ

た。

・第 7 回研究会

2011 年 12 月 17 日（土）の第 7 回研究会は、李知蓮（法政大学国際日本学研究所学術研究員）による『「日本」と「義理」』の報告であった。

日本における「義理」の研究は近代以降に始まった。前近代の「義理」は研究対象ではなく、「挨拶」や「世話」のように、人々がともに生き支えあうところに発生する倫理観念の一つだったが、近代になって「義理」が「研究され」始める。多くのものが近代化されたが「義理」は生き残った。本研究では、「義理」に関する先行研究が設定してきた「日本」という枠そのものを対象にしている。「西洋」の倫理観念と相対する「特殊」なものとしての「義理」という構図は疑われてこなかった。そこには、韓国や中国など北東アジアの国々の「義理」との国際比較が欠如し、研究対象であるはずの「日本人」の定義も抜けている。本研究は、今までなされなかったアジアの国々との国際比較、研究対象や資料の実体化をおこなっている。国家としての「日本」と対比される地域社会の生身の人々としての「日本人」、それらが混交してきた日本社会のあり方についても様々な観点からの議論ができた。

・第 8 回研究会

2012 年 1 月 21 日（土）の第 8 回研究会は、川﨑瑛子（法政大学国際日本学研究所学術研究員）による『薬品会から見える日本意識』の報告であった。

薬品会とは宝暦 7（1757）年に田村藍水によって始められた会である。これは本草学者や医者、薬種商などが中心となって珍貴な物や疑問のある物を全国から集め、それらの真贋を吟味し、情報交換を行う集まりであったとされている。従来の研究では薬品会によって藩を超えた学者同士の知的交流が活発になったとされており、それは「ネットワークの形成」という表現で語られることが多い。しかしこれは薬品会の開催によってもたらされた「結果」の一つであり、薬品会には他の機能もあった。今回の研究会では「日本意識」という視点から薬品会の意義を探った。

「大日本ハ神區奥域」という言葉から始められている引き札では、外国の風土と日本を比較する事で、日本に自生する本草が持っている有益性を解明する事こそ薬品会の目的だとされている。本草学は日本の自給率を向上させる事を

目的に全国の物産調査を行っており、日本を背負って立つ学問としての地位を獲得するに伴い、中国の知識に惑わされることなく眼前に広がる現実の事物から日本を発見していこうとしていた。「大日本」という言葉から始まる引き札によって結びつけられた学者達は、薬品会の会場で全国から集められた実際の物を見て、それらが自生している場所の風土や民俗と物の情報を交換しあうことによって、日本とは決して単一の場ではなく、様々な要素が複合し合いながら構築されている場所であり国だという認識を育んでいったのである。

シンポジウム

・2011年7月16日（土）、17日（日）国際シンポジウム『日本意識と対外意識』

代表者である田中優子による司会のもと、石上阿希氏（立命館大学、大英博物館）と岩崎均史氏（たばこと塩の博物館）による研究発表、小林ふみ子氏（法政大学）によるこれまでの研究のまとめ、そして討論が行われた。また、第2日目には、ロナルド・トビ氏（イリノイ大学）による記念講演、タイモン・スクリーチ氏（ロンドン大学 SOAS）、大木康氏（東京大学）、川村湊氏（法政大学）による研究発表、渡辺浩氏（法政大学）によるコメントと発表者との質疑応答、そして場内からの質疑応答が行われた。シンポジウムの概要は以下の通りである。

第1日目の最初の発表者である石上氏の論題は「春画をめぐる対外意識―春画を作る、見る―」であった。「中国に起源をもつ」ということを強調することで春画の正統性を示そうとする、という日本の春画の特質が、資料に基づき明らかにされた。

岩崎氏の発表は「近世庶民に於けるアルファベット受容の傾向～ ABCD（アベセデ）の魅惑」と題して行われた。江戸時代におけるアルファベットとの「出会い」は17世紀末のローマ数字を漢数字に置き換える作業から始まり、その後、「ごく僅かのアルファベットを読める人には作者の意図が分かり、大部分のアルファベットを読めない人には異国風という印象を与える」という「仕掛け」により、アルファベットは江戸時代の日本人の一部の人の間で享受されるようになった。しかし後代になると「正確な模写」に代わり「異国の雰囲気を出す」ということが主な目的となり、アルファベットの表記が不正確になって「異

国風」というイメージのみが残る、という状態が明治時代を迎えるまで続くことになった、という事実も示された。

「春画」と「アルファベット」という二つの要素を通して、近世の日本人にとって中国と西洋は同次元にはないことが示されたことが、この日の発表の成果であった。

第2日目は、まずトビ氏による記念講演「日本中・近世の異国・異邦人」が行われた。「「日本」を認識するためには、まず非「日本」として表象された他者を認識しなければならない」という観点に基づき、最初に外との関わりを示す日本の神話を外に出て何かを持ち帰る「桃太郎型」と、外から歓迎されざる他者が来航する「白楽天型」の二つの類型に分類し、倭寇や蒙古襲来、キリシタンの来航などが「白楽天型」に属することが論じられた。次に、絵画を対象として、古代から中世あるいは前近世までは、日本の絵画には唐土の風景を描く作品はあるものの、日本の地に異国の人物を描くのは例外的であることが示された後、南蛮人の渡来以降は長崎や京都において異国人が往来することが日常的になったため、絵画の中に唐以外の異国の人物が多く登場するようになり、この点に日本における対外意識の変化の一端が現れている、という指摘がなされた。

これに続き、南蛮人の登場が「本朝、唐、天竺」という伝統的な三国世界観にいかなる影響を与えたかが検討された。日本の自己認識の変化が、他者としての異国の認識に変化をもたらしただけでなく、「他者があっての自己認識、異国があっての日本意識」という構造が成り立つことが、今回の講演であらためて確認されたのであった。

スクリーチ氏の発表「メメント・モリと吉祥画の出会い」では、江戸時代において吉祥画とメメント・モリが比較されるような接触を持った3度の機会を取り上げ、吉祥画とメメント・モリとの相違が検証された。取り上げられたのは、(1) 大目付井上政重が明暦の大火（1657年）で所有していた絵画を失った将軍家のためにオランダ商館に絵画の制作を発注した事例、(2) 徳川吉宗がオランダ商館に「ヨーロッパで一番有名な画家に絵を描いてもらいたい」という依頼を出し、5点が献上された事例、(3) 江戸に滞在していたオランダ商館長の快気祝いの席に掛けられた絵を巡る日本人との問答を記録した司馬

江漢の記事の事例であった。これらの具体的な事例により、「死を忘れないため」にメメント・モリを用いる西洋人と、「死を忘れるため」に吉祥画を用いる日本人との間に存する絵画に対する理解と態度の違いが指摘された。

大木氏の発表は、「江戸時代人の対中意識―「漢」と「唐」をめぐって―」と題して行われた。漢文や漢籍といった「古典としての中国」を「漢」、「同時代的、具体的な中国」として「唐」の言葉を用いる江戸時代の通例に基づき、「唐」が江戸時代の人々にどのように捉えられていたかが、言語、絵画、音楽の三点から分析された。「唐話」が「非日本語」としてさまざまな形で享受されたことも紹介された。また、絵画の場合には、同時代の中国の人々の様子が版本として広く流通したことが提示され、音楽については、明清楽が知識人の間で流行し、日清戦争の頃まで月琴の師匠が月琴の教授で生活が出来る程度に需要があったことが示された。「漢」と「唐」という二分法による中国認識は、江戸時代における「日本人」が「相手をどのようにみるか」という意識であり、それは鏡としての「日本意識」そのものであるといえること、そして、「日本意識」の鏡として「中国」が存在したことが指摘された。

「神国日本・震災日本」と題して行われたのが、川村氏の発表であった。「くらげなす漂へる」という『古事記』の冒頭の一節や、高天原からみたときに中つ国が禍々しいところであった、という記述が示すように、「不定型で危ない国」としての日本という認識は、神話における「国生み」や「国寄せ」という考え方が「震災や災害のさきわう国」の含意であり、江戸時代の鯰絵も「日本は災害のある国」という自己認識に基づいていることが示された。このような自己認識は、現代においては小説や漫画という形式を取って表現された。『古事記』から現代の『ドラゴンヘッド』に至るまで、「日本は災害の多い国」という日本人の自己認識は比較的正しいものであるが、「科学的に安全」という態度が「震災日本」という事実を等閑視させることになったのであり、3月11日に起きた東日本大震災を契機として、われわれは改めて日本に対する自己認識を適切に抱く必要がある、という指摘がなされた。

17時5分からは、田中優子氏を司会者、渡辺浩氏（法政大学）をコメンテーターに迎え、発表者に対する質疑応答が行われ、最後に会場の参加者からの質問や意見とそれに対する回答がなされ、2日間にわたる国際シンポジウムは閉幕と

なった。この2日間を通して、学際的な国際日本学において「日本意識」を対象とした研究を行うにあたって、「日本意識」だけではなく、他者としての「異国」あるいは「世界意識」を常に念頭に置くことが不可欠であり、それによってより多層的、複眼的な研究がなされうることがあらためて示された。

・2011年度（2012年3月9日〔金〕）シンポジウム『＜日本＞を意識する時』

4件の研究報告の概要は以下の通りであった。

＊木村純二（弘前大学）／和辻哲郎の日本意識―国民道徳論との関連から―

明治維新後に生じた表面的な欧化政策が行き詰まりを見せた明治20年代は、大日本帝国憲法の発布（1889年）や教育勅語（1890年）などによる「上からの統制」と、日清戦争の勝利による国家意識の高まりという国民の内面のあり方の変化があった。それを背景として生じたのが、天皇への「忠」と「孝」とが一体化し、武士道によって支えられた国民道徳という考え方であった。和辻哲朗は歴史的な観点から合理的な批判を行ったものの、道徳の内容を分析するだけで道徳がもつ効果は分析されなかった。その点で、「献身」の対象を求める人々の非合理的な感情に対して説得的な議論とはなりえなかったことを明らかにした。

＊横山泰子（法政大学）／幕末の災いと日本意識

文明の進化は人間や国家の高度化をもたらし、その一部が壊れると全体が被害を受けるという意味において、国民国家の成立は、局所的な問題が国家全体の問題となる。国民国家が成立する以前の段階において、天災が国難となることはあったのか。寛文近江若狭地震や、安政地震の際には、「神々が鬼のような異国人と戦っているために地震が起きた」、「日本に開国を求めた諸国は津波で壊滅した。昔は神風で蒙古軍を打ち負かしたが、今は地震や津波が日本を救う」といった噂話が記録されている。これは、「日本が外国から侵略されるときには自然現象が窮地を救う」という観点に基づいていると考えられる。天災と外国人との関わりという点について、「地震を起こす主であると考えられていた鯰と異国人が首引きをし、地震が勝つ」という内容の鯰絵が描かれた。また、安政のコレラが流行した際に、「異国人がもたらした石鹸が原因である」、「異国からの廻し者が放った千年モグラが原因だ」といった噂が発生するなど、「病気の原因は異国人である」とい

う考えがあった。一方、外国人の中には、「日本人はコレラの流行を外国人のせいにしたが、日本人の方は、コレラ流行時のヨーロッパの人々よりも落ち着いた行動を取っていた」という評価を行う者もいた。以上のことから、危機的な状況の際に日本が強く意識される、ということができる。

＊福田安典（日本女子大学）／「平賀源内の日本意識」

各種の著作において世界各国の様子に言及するというのが、平賀源内の特徴であった。自著の中で対象の名称にラテン語による表記を用いた。「世界で通用する言語はラテン語である」という趣旨の記述を残した。新井白石の影響を受けていたと考えられる。名物学が平賀源内の本領の発揮された分野だった。名物学とは中国の典籍の中に現れる事柄を日本の事柄と一致させ、漢字という「名」を日本の実在物という「物」に比定する学問であった。火浣布やエレキテルを記述する際に対応する西洋語を掲載するのは、まさに名物学の手法そのものであった。名物学の手法は小説を書く際にも用いられており、その意味で、名物学は平賀源内にとって内面化した学問であるといえる。このような平賀源内の態度を勘案するとき、「名物学を中心とし、日本にはない海外の文物を日本で生産することが日本の利益になる」ということが、平賀源内にとっての日本意識であった。

＊佐藤悟（実践女子大学）／19 世紀の出版統制と外国

文化四（1807）年、従来の行事改に加え、四人の名主による名主改の制度が始まり、出版物の検閲体制の再編が行われた。名主改制度の導入の背景には、文化露寇と呼ばれる日本とロシアの緊張関係があった。

幕府は江戸において文化露寇に関わる風説の流布などを禁止する町触を出し、出版統制の更なる強化を図り、従来の行事改から名主改へと、統制を強化した。具体的には、元寇を時代背景とした『由利稚野居鷹』は、ロシア軍の侵攻を連想させたため、時代背景を承久の乱後に変更させたり、『泉親衡物語』では文章の改変を指示したなどの具体的な事例が知られている。これらの統制は、文芸作品が商業出版であったため、処罰が板元の経済的な損失に直結し、有効に機能した。これらの規制はロシアとの関係に限られ、オランダ等との問題については放任されていたようである。幕府の外国への危機意識は、攘夷という形ではなく、ロシアに対する情報統制という形

で現れたことに注目しなければならない。

以上のような報告を受け、全体討論では日本意識を巡る諸問題について活発な議論が行われた。その中で、「直接体感できる危機は対象だが、体感できない危機や国難はどのように理解されたのか」、「どのような主体が国難を理解したのか」、「危機と日本意識が一体化するのはどのような状況か」、「日本意識は対外的な優越感と劣等感の合成物ではないか」といった意見が提出された。

このような意見は今後の研究を進める際の指針となり得る。2011 年度の研究活動の集大成として、意義のあるシンポジウムが行われた。

海外における発表

2011 年 5 月 5 日、メンバーの鈴村裕輔がハワイ・オアフ島のハワイ・コンベンション・センターで開催された Joint Conference of the Association for Asian Studies and International Convention of Asia Scholars において、“Concept of *kami* in Japanese Animation and Comic: Late 20th Century Japanese Thought and Popular Culture” と題して発表を行った。発表の趣旨は、神道における神の概念が 20 世紀後半の日本のアニメーションや大衆文化にどのような形で現れたか、というものであった。

また 2011 年 7 月 5 日（火）から 7 月 7 日（木）まで、メンバーの鈴村裕輔がマレーシア北部のアロスターに所在するマレーシア教育省の研究機関である国立教育マネジメント・リーダーシップ研究所（IAB）北部支所において開催された The 2nd Regional Conference on Educational Leadership and Management (RCELAM 2011) で、“Influence of Education on Democratic System: Focusing on “More Relaxed Education” in Japan” と題する発表を行った。発表は、「日本の民主主義の将来にどのような影響を与えるか」という観点からいわゆる「ゆとり教育」のあり方を検討する、という内容であった。現在の日本の教育を出発点として発展途上の諸国を対照とすることで、現在の日本の置かれた教育上の問題点が、10 年後、20 年後の各国の問題を先取りすること、またそのような問題への取り組みを通して、教育における日本の特徴、独自のあり方が示唆された。

おわりに

年度初めの打ち合わせ、研究会、シンポジウム、海外での研究発表などを重ねるごとに、アプローチ①のメンバーは、「日本意識」という抽象的な概念に、具体的な中身を発見してきた。具体的な事例のひとつひとつが、「日本意識」という観点に照らされて別の面を露わにする。その結果、極めて興味深い新しい側面を見せるようになった。

2011 年度は、「日本意識」に照らされた具体的な研究が拡がり、様々なものが見えてきた。同時に、東日本大震災により、この研究テーマが伝統的な日本観の研究にとどまらず、現代および未来に向けて重要な研究であることも認識できた。

今後の課題は、具体的な研究対象をさらに拡げながらも、そこに歴史を貫く法則性を発見することである。「危機」をひとつのキーワードにして、法則性の発見に向かってゆきたい。

研究アプローチ②
「近代の＜日本意識＞の成立－日本民俗学・民族学の問題」

アプローチ・リーダー：ヨーゼフ・クライナー

『日本民俗学・民族学の貢献 ―昭和 20 － 40年代まで―』

戦略的研究基盤形成支援事業「国際日本学の方法に基づく＜日本意識＞の再検討－＜日本意識＞の過去・現在・未来」研究アプローチ②は、昨年度討論してきた昭和 10 年代の両みんぞく学すなわち民俗学と民族学（＝文化人類学）の「多民族国家の大日本帝国及びその内地及び植民地における日本意識の形成」をテーマとして継承し、今年度は昭和 20 年から 40 年代頃までの両学問分野の発展を報告し、討論することにした。研究プロジェクト参加者は昨年度とほぼ同じで、海外からはアメリカのスタンフォード大学のハルミ・ベフ（Harumi Befu）名誉教授、プリンストン大学のエミー・ボルボイ（Emy Boroboy）准教授、ドイツのボン大学のハンス・ディータ・オイルシュレーガー（Hans-Dieter Ölschleger）准教授、韓国ソウル国立大学校の全京秀（Chun Kyung-soo）教授が参加し、国内の研究者としては、引き続き法政大学の曽子才教授、山本真鳥教授、川村湊教授、学外から北海道大学の桑山敬己教授、山崎幸治准教授、東京大学の伊藤亜人名誉教授、神奈川大学の福田アジオ教授、早稲田大学の鶴見太郎教授、東京学芸大学の石井正己教授、国立民族学博物館の近藤正樹教授、清水昭俊名誉教授、東亜大学の崔吉城（Choi Kil-sung）教授、神奈川大学の川田順造特別招聘教授、新たに、桜美林大学の中生勝美教授、元一橋大学教授の長島信弘氏、東北大学の杉山晃一名誉教授、熊本県立大学の大島明秀教授の四名に入って頂いた。

今年度は四つの研究会を開催した。その最初の二つは、5 月 20 日・21 日及び 6 月 10 日・11 日にわたって開かれ、戦後間もなく、旧植民地の帝国大学あるいは諸外国にあった日本の研究機関から引き揚げてきた研究者が、いわゆる外地での経験等を日本国内でどういかして民族学あるいは民俗学を確立し発展させてきたか、という点は、20 世紀後半に著しい発展をみせた文化人類学や民俗学の学史を理解するための重要な研究課題であるというテーマを中心

にした。特にアメリカ占領下の日本においては、GHQ の CIE 民間情報及び教育局の調査研究活動で果たした研究者の役割は重要である。彼らがその仕事場で学んだアメリカの文化人類学、社会人類学の方法論あるいは調査の仕方に、「日本とは何か」という定義づけに直面したことに大きな意味があったことは確かである。そこで活躍した研究者、例えば石田英一郎、馬淵東一、関敬吾らは、岡正雄、梅棹忠夫の活動と、柳田国男との研究交流と対峙については、何人かの研究プロジェクト参加者から報告された。特に 5 月の研究会では、東京大学文化人類学研究室設立をめぐる状況が、当時の一期生や二期生の研究者による報告（竹田旦）や討論（福田アジオ）により、これまで以上に明らかになった。二回目となる 6 月の研究会では、神奈川大学の川田順造特別招聘教授もこの点を取り上げ、当時の様子を克明に報告された。なお、6 月の研究会の前半（6 月 10 日（金曜日）夕方）は、法政大学を初の会場として開催された日本文化人類学会第 45 回研究大会を記念するかたちで、シンポジウム形式での発表となった。大勢の出席者から大変良い反響を頂いた。法政大学は、柳田国男先生はじめ、多くの研究者を教員に招いた歴史がある。石田英一郎先生は 10 年にもわたって法政大学文学部で教鞭をとっていた。元総長を務めた中村哲先生は台湾や沖縄研究と深いかかわりがあった。そのような背景を踏まえ、このアプローチ②の研究が法政大学における文化人類学及び民俗学の研究にも刺激を与えることができたのではないかと確信している。

三回目の研究会は、2011 年 10 月 21 日にロンドン大学インペリアルカレッジ名誉教授のロナルド・ドーア（Ronald Philip Dore）先生を講師にお招きして「特別研究会」として開催した。

現在は 86 歳のドーア先生は「昭和 20 年代の日本社会調査を振り返って」というテーマで、いきいきした話をして下さった。「私の一生は幸運の連続であった」と先生は何度も繰り返した。まず、高等学校を卒業すると同時に、イギリス外務省にスカウトされて第二次世界大戦に突入する母国のために、普段はあまり研究されていないアジアの言語を勉強してもらえないかと勧奨され、自らはトルコ語と中国語を志願したが、日本語に振り分けられた。ロンドン大学東洋アフリカ学院 SOAS に設けられた日本語学校の特訓コースを第一期生として最優秀の成績で卒業し、最前線に送られることなく恩師のフランク・ダ

ニエルズ（Frank　Daniels）教授のもとで講師として大学に残り、後輩を教えることになった。1947 年、ロンドン大学で博士号を取得し、1 年間日本に留学するための奨学金を与えられたが、アメリカの GHQ が日本入国ビザを発行しなかったため、しばらくロンドンに留まって、ダニエルズ夫人のオトメさんのサロンで、戦後ロンドンに立ち寄ったわずかな日本人と出会うことになった。そのなかでも江上波夫という名前をよく覚えていたという。ようやく 1950 年にイギリス大使館文化部の無給補佐官として東京に赴いた。その時の研究テーマは江戸時代の日本の寺子屋などの教育制度であったが、長い船旅の間に当時ヨーロッパでよく読まれた *Middletown* という社会学的なモノグラフを熱読し、せっかく日本で勉強できるのだから、図書館ばかりにこもらないで生きている日本人の社会に溶け込もうとした。そこで、新宿区の「したやま町」に下宿し、都市に住んでいる日本人の生活を研究し、後に *City Life in Japan*（邦題『都市の日本人』）という著作にまとめた。そのとき日本側で交流にあった方々に、丸山眞男、福武直などの先生方の名前をあげていた。ロンドンに戻った時点で *Scarborough Report*（スカーボロ侯爵リポート）がそれまでにヨーロッパで主流であった文献学を中心とした日本学を厳しく批判して、ロンドン大学に社会科学系の日本研究の場が設置され、その教員のポジションを得ることになった。イギリス政府や財界は日本で共産主義革命が起こるのではないかと懸念しさまざまな研究会が開かれており、再度の幸運により日本の農地改革調査に派遣され、山形県と山梨県をフィールドに研究をした。その成果は後に *Land Reform in Japan*（邦題『日本農地改革』）という著書にまとめられた。カナダのブリティシュ・コロンビア大学に招聘され、その頃、「海を渡った日本の村」の調査でカナダに渡ってきた鶴見和子、蒲生正男と出会った。

このような、自身の日本との係わりの回顧の後に行われたディスカッションでも、ドーア先生は柳田国男先生などの日本の民俗学の研究者などについてのご自分の考えをまとめて述べた。

第四回目の研究会は、2011 年 11 月 18 日（金）・19 日（土）の二日間にわたって開催した。

今年のテーマは、主に終戦から昭和 40 年前後の日本の民俗学・民族学の動きが、終戦を迎えるまでは植民地を多数かかえた多民族国家であった大日本帝

国から、にわかに「単一民族国家」となった歴史的過程が日本の学界にどのような影響を与えたかを分析し、討論するものである。この研究会では、地方レベルでの民俗学研究ないし郷土史研究の動きと、アイヌの研究についても取り上げた。

11 月 18 日（金）は、熊本県立大学文学部の大島明秀准教授に「戦後熊本における郷土史編纂活動―「郷土文化研究所」を中心に」というテーマでご報告頂いた。昭和 23 年に熊本県で設立された郷土文化研究所についての、非常に興味深い報告であった。当時の熊本では、いくつかの大学が新設され、県知事、国会議員、マスメディアをはじめとする政財界と学界の名士が 80 名も結集して「熊本人とは何か」を問う学術機関を創る運動を展開していた。これは幅広い企画で、阿蘇、天草、球磨郡などの地域の現地調査、また考古学から近世史にわかる幅広い時代を研究の対象とした。近代史が取り上げられていないのはその特色である。この研究所は熊本女子大学を中心に置かれたが、後に熊本県立大学が設立された際には、大学の組織としては設置されなかった。また、この研究所の中心的な人物であった圭室諦成が明治大学に移籍し熊本を去った後は、活動が後退し、3 年間で終わったが、学生の勉学のレベルでは長く影響を与えた。討論では、熊本の郷土研究とは対照的に、鹿児島では高校の教員を中心とした数々の小さな研究会が今でも活動を続けていることと、熊本の郷土研究は博物館設立にはつながらなかったことなどが指摘された。
11 月 19 日（土）は、北海道大学大学院文学研究科の桑山敬己教授が「日本のアイヌ研究に関する若干の考察」、北海道大学アイヌ・先住民研究センターの山崎幸治准教授が「雑誌『民族学研究』におけるアイヌ研究―終戦から昭和四〇年代まで―」というテーマで、それぞれ膨大な資料を巧みに整理し分析し、戦後のアイヌ研究、特に昭和 30 年代の問題をとりあげた。昭和 24 年から数年間にわたって行われた、日本民族学協会の沙流谷アイヌ総合調査が中心的な話題となった。またこれらの調査が、岡正雄を通じて諸外国、特にウィーン大学におけるアレクサンダー・スラビック（Alexander Slawik）教授のアイヌ研究にどのような影響を及ぼしたのかが検討された。

研究会の最後に設けられた総合討論では、今年度の研究をふまえ来年度の研究テーマについても話し合われた。清水昭俊国立民族学博物館名誉教授など

からの助言で、来年度も戦後から現在に至るまでの日本の民族学と民俗学が日本意識に与えた影響を研究対象とすることになった。ただし、昨年度・今年度とは研究会のかたちを変えて、戦後の主だった民族学と民俗学の転換期に活躍した研究者をお招きして話題提供を頂き、それについて討論していくかたちの研究会を設ける方向で検討することとなった。

更に本アプローチでは、公益財団法人三菱財団研究助成「日本民族学形成における岡正雄」との共催で、2012 年 3 月 10 日・11 日の二日間にわたって国際シンポジウム「岡正雄―日本民族学の草分け」を法政大学市ケ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26 階スカイホールで開催した。ドイツから 3 名、オーストリアから 2 名、法政大学はじめ日本国内の 10 名の研究者の発表があり、国内外から 200 名程の参加者があった。

岡正雄（1898-1982）は日本の民族学の設立の親である。旧制松本中学校（長野県松本深志高等学校）から旧制第二高等学校を経て東京帝国大学文学部社会学科を卒業した後、柳田國男の談話会に 1926（大正 15）年から参加し、柳田とふたりで雑誌『民族』を編集・出版した。岡は、折口信夫の「まれびと」論に刺激され、論文「異人その他」（1928［昭和 3］年）で初めて注目を集めた。談話会が分裂した後、澁澤敬三の奨学金で 1929（昭和 4）年にヴィーンに渡り、ヴィーン歴史民族学派の W. シュミット（P. Wilhelm Schmidt）、W. コッパス（P. Wilhelm Koppers）、R. ハイネ・ゲルデルン（Robert von Heine-Geldern）に師事。1933（昭和 8）年、*Kulturschichten in Alt-Japan*（『古日本の文化層』）で博士号を取得し、1935（昭和 10）年までにその原稿を全 6 巻、1500 頁にまとめた。「日本文化はいくつかの異なった文化複合からなる、多元的起源を持つ文化だ」と主張する「幻の論文」と呼ばれた大著が、このたび初めてドイツ語の原文で出版される。このシンポジウムは、これを記念するもので、岡の学問及び日本における民族学の展開とヨーロッパの日本研究の改革に与えた影響の総括的評価を試みた。

シンポジウムの一日目は、まず、岡正雄の生涯を通じての業績を包括的に分析するとともに、その研究が日本の文化人類学やヨーロッパの日本研究に及ぼした影響について、三つの報告（ヨーゼフ・クライナー・清水昭俊国立民族学博物館名誉教授・川田順造神奈川大学特別招聘教授）があった。

次に、海外からみた岡の業績と日本の民族学の国際舞台における位置を取り上げた三つの報告（クリストフ・アントワイラー［Christoph Antweiler］ボン大学教授、ハンス・ディータ・オイルシュレーガーボン大学准教授、桑山敬己北海道大学大学院教授）が続いた。岡は、欧米以外の研究者として初めての国際人類学・民族学協会の会長に選ばれ、1968（昭和 43）年に初めてアジアで大会を開催することに成功した。

二日目は、個別研究について、まず神話研究についての二つの報告（平藤喜久子国学院大学准教授、クラウス・アントニ［Klaus Antoni］テュービンゲン大学教授）、日本における民族博物館の形成と岡の尽力についての報告（近藤雅樹国立民族学博物館教授）があった。歴史的な岡の役割を取り上げた報告が二つ（中生勝美桜美林大学教授、セップ・リンハルト［Sepp Linhart］ヴィーン大学教授）と、岡の研究の方法論と歴史民族学ないし社会人類学についての報告が二つ（ベルンハルド・シャイト［Bernhard Scheid］オーストリア学士院研究員）、住谷一彦立教大学名誉教授）、最後に岡の北方研究すなわちアイヌとアラスカについての報告（岡田淳子北海道立北方民族博物館館長、祖父江孝男国立民族学博物館名誉教授）があった。祖父江先生と住谷先生は、当初は岡の助手として、そして後に協力者として活動してきたことを通じての、岡の個人的な側面にも触れたお話があった。最後に、岡の長男である岡千曲相模女子大学名誉教授が父としての岡のことをお話下さり、シンポジウムを締めくくった。

討論の成果として、岡の学問は、およそ次の何点かの主だったテーマにわけることができる。それは、第一に折口から継承した来訪神信仰及び村のレベルで行う仮面仮装行事、第二にそれを日本以外、特にヨーロッパの現象と比較する試み、もう一つは、日本の基層文化における社会組織、特に年齢階梯制と若者組の役割、更にアイヌ研究が日本の民族・文化の起源に一つの役割を果たした北方文化の影響であった。それを統合したかたちで多元的な日本文化の起源論を提唱し、1948（昭和 23）年には江上波夫、八幡一郎、石田英一郎が参加した学際的なシンポジウムを開催し、討論した。このシンポジウムは、20 世紀後半の日本の民族学・文化人類学の出発点になったといえ、江上波夫、坪井洋文、佐々木高明、井上光貞、大野晋などの研究者はそこから刺激を受け、

持論を発展させたのであった。

岡の組織力も非常に大きなものであった。1938（昭和 13）年にヴィーン大学に設立し、指導した日本学研究所において社会科学的なアプローチをとった日本研究は、アメリカ、あるいはイギリスの日本研究のパラダイムの変化より 10 年も早いもので、現在もその伝統を受け継いでいる研究者が大勢いる。日本で戦時中、文部省の民族研究所を指導し、大勢の日本の民族学者・文化人類学者を育成した。また、1951（昭和 26）年に東京都立大学の社会人類学科、1960（昭和 35）年に明治大学の社会人類学科、1964（昭和 39）年に東京外国語大学アジア･アフリカ言語文化研究所を設置した。それぞれの立場から、研究史に大きな影響を与えた現地調査を実施した。そのなかの重要なものだけを挙げると、東京都立大学の伊豆半島伊浜や伊豆諸島調査、明治大学のアラスカ調査、そしてアジアの研究者が初めてヨーロッパの基層文化を研究対象とした明治大学の中部ヨーロッパのドイツ語圏村落調査がある。

ちなみに、岡が 1935（昭和 10）年にヨーロッパから帰国して最初に民族学について講義を行ったのは法政大学であった。

なお、2010、2011 年の研究会での報告ならびに討論の成果を『近代＜日本意識＞の成立―民俗学・民族学の貢献』（全 446 頁）として東京堂出版より刊行した。本書は三部から成っている。第一部は「日本民族とは何か」で、4 部の論考を収録した。第二部は「植民地の多民族国家の民族学と民俗学」で、9 部の論考を収録した。第三部は「戦後のパラダイムの再編成」で、13 部の論考を収録した。その後のシンポジウム、研究会の成果は、やはり東京堂出版から『日本民族学の戦前・戦後―岡正雄と民族学の草分け』と題し、2013 年 3 月に出版する予定である。

研究アプローチ③「＜日本意識＞の現在－東アジアから」

アプローチ・リーダー：王　　敏

(1) 研究目的

アプローチ③は、中国、東アジア重視の理念に基づき、これまでの研究姿勢と成果をもとに時代の変化に対応できると位置づけられる。文化背景の相異により変化する日本意識の研究を通して、再発見と、学習、学術発展を目指している。地域性を反映させるおのおのの研究成果から、建設的思考を抽出し、東アジア、特に日中両国にとっても有用な参考ケースを提供していきたい。日本という地域に限られた「日本意識」を脱して、地域の発展に貢献できる、自他再認識のための「日本意識」を再検討し、互いに「参照枠」となる啓発型の研究活動を志向するものである。

(2) 研究内容

【文献研究】

「日本意識」の現在に関する文献研究のテキストとして、2010 年 3 月から 10 月にかけて中国・世界知識出版社から刊行された『日本現代化歴程研究叢書』（10 冊）に選定した。

1.『日本現代化歴程研究叢書』の概要

同叢書の企画・編集・執筆を担当したのは南開大学日本研究院前院長、教授（現在、同大歴史学院院長）の楊棟梁氏である。同叢書は、中国教育部が制定した「人文社会科学重点研究基地重要プロジェクト『日本現代化歴程研究』」であり、また同時に、日本の国際交流基金からも研究援助を受けた「日本近現代史研究(2001-2005)」の研究成果でもある。日中両国からの支援を受け、毎月 1 回の研究会を 10 年間継続して開催し、各分野を俯瞰した最新の研究成果として発表された研究論文を、読者の便宜をも考慮して歴史的な変遷を中心に編集している叢書である。刊行にあたっては、南開大学世界近現代化進程研究哲学社会科学創新基地（985 プロジェクト第 2 期）による助成を受けたという。

叢書の各巻構成が以下のとおりである。

『日本現代化歴程研究叢書』、世界知識出版社、2010 年 3 月～ 12 月順次刊行、計 10 冊。

◆『日本近現代経済史』楊棟梁
◆『日本近現代政治史』王振鎖・徐万勝
◆『日本近現代外交史』米慶余
◆『日本近現代社会史』李卓
◆『日本近現代文化史』趙徳宇など
◆『日本近現代絵画史』彭修銀
◆『日本近現代思想史』劉岳兵
◆『日本近現代教育史』臧佩紅
◆『日本近現代対華関係史』宋志勇、田慶立
◆『日本近現代文学史』王健宜・呉艶・劉偉

2. 文献研究のテキストとする理由

・同叢書に対して発刊地域の中国国内では広く認められている。中国の専門家によれば同叢書は中国の日本研究界においても、ほかに例を見ないプロジェクトだといい、中国における日本研究の学術体系を再構築できるものと認識している。
・叢書の編集責任者でもある楊棟梁教授による「日本モデル」の定義が明確に出されている。特に経済面ではイギリスなど西洋諸国中心の「発展モデル」に比較すれば、日本のような「後発モデル」がインドなどのような「依存モデル」、中国などのような「跳躍モデル」とは、いずれも後発型経済をもとにした「超越モデル」とされている。これらのモデルを比較検討する中で、日本はアジアにおいて「近代化」を成し遂げた先行国として、研究の意義が大きいと設定されている。また、日本は後発型発展モデルの典型であると同時に、継続発展の可能性と方向性を示してくれる開拓者でもある。それらの両方を中国は日本から学ぶことができると指摘している。

・南開大学における日本研究の伝統が長く、成果が突出している。同叢書は、日本研究院の全体的結集であり、日本研究のチームモデルといえよう。

3. アプローチ③から見た同叢書刊行及びその成果の意義

(1) 中国における日本認識の再定義を指摘した

中国にとって、日本という隣国の認識は、戦争による「敵対関係」から、国交正常化を経て「日中友好の対象国」へと変遷し、その後は1980年代の改革開放政策の開始と共に、大規模な「経済援助の支援国」としての存在であった。現代中国における日本の位置づけとは、このように両国の歴史関係と発展段階の相違によって、大きく変化してきたのである。

叢書では、このように変化してきた中国における日本の位置づけについて、学ぶべき「近代化のモデル」として明確に再定義したことが大きな特徴である。それは、換言すれば「研究対象国」として再認識したと言うこともできよう。隣国であると同時に、もっとも研究すべき国として意識したことが、この叢書の大きな問題意識と言える。近隣国として、末永く平和的に付き合っていくためにも、その地域性乃至社会運営メカニズムなど全面的に認識しなければならないという問題意識があるがゆえの刊行である。

研究者などの専門家は言うまでもなく、一般読者も対象にして、広範囲の読者に受け入れられることを想定した編集には、企画者の明確な思想の一貫性がうかがえる。中国にとって、日本という隣国をどのように定義し、評価するかという問題は、非常に複雑かつ困難な問題であるが、「中国の参照枠」としての一貫性が強調されている。

(2)「日本研究大国」の進展を示した

中国では、『山海経』や『魏志倭人伝』をはじめ、歴史的にも日本研究が豊富である。日本研究の書籍は世界でもっとも多く、日本を見つめる熱い視線を感じることができると言えよう。

今回の叢書刊行では、その「日本研究大国」としての、さらなる飛躍が明らかになった。特に、叢書の企画、編纂、刊行に至るまでの具体的な準備作業が充実したものであったことは、関係者から聞き及んでいるところである。

さらに、注目したいのは、毎月の研究会開催を10年間継続したことが、研究基盤として重要な意味を有していたことである。

同叢書は従来の日本研究の成果を踏まえた上で、さらに多角的な方法論を併用したことである。地域研究の視角から、対象国としての日本を捉え、さらに日中という相互の参照枠にして照り合わせて分析し、なおかつ世界的な基準を意識して検証しようとする研究姿勢は、中国における日本研究が顕著に発展していることを実証するものである。日本と中国の近代化の過程を検証するという、相互に影響しあう研究の取り組みにも、非常に有用な視座だといえよう。

(3) 日本研究を継続させている背景が覗える

近年、中国の学界において日本研究が飛躍的に充実している背景には、以下の事象を指摘することができる。

・日本語科学生数の急増に伴う日本を知る参考書需要の拡大
　国際交流基金の統計によれば、中国における日本語学習者数は世界最多の86万人である。

・近年の中国における日本翻訳作品の超人気
　漫画やアニメなど、若者世代から支持される日本文化を中心に、近年では日本の小説が刊行直後に中国語訳されるなど、文化的なブームとなっている。

・日本学術界との盛んなる交流と日本研究レベルの向上
　これまでの学術交流が、分野、規模、人員数など、あらゆる面で充実しつつある。

・中国人の世界に対する関心の高さ
　経済発展を背景として、中国人が世界的な視野を広げ、好奇心旺盛に外国文化を受け入れており、もっとも身近な日本文化に強い関心が集まっている。

・方法としての日本研究

(4) 文献研究を通して得られた収穫の中で、「参照枠」としての日本研究という視座への再認識である。「参照枠」の照射範囲で中国における日本研究を概

観すれば、大衆文化的なレベルから学術的な領域まで、各分野において優れた成果を見せているが明確になる。そこからさらに深めていくことにより、学術交流による相互理解及び相互発展を加速することの可能性が浮かんでくると考えられる。

【研究会の開催】

1.「参照枠」としての研究という課題を実践すべく、2011 年度、法政大学国際日本学研究所で開催する東アジア文化研究会では、上述の叢書 10 巻の輪読を中心に議論し、研究報告を行ってきた。中国における日本研究と、日本における中国研究が連動することによって、「参照枠」がさらに発展的に活用されることを期待している。研究会の開催につき以下の一覧をもって紹介する。

表 1　法政大学国際日本学研究所 2011 年度東アジア文化研究会・シンポジウム一覧

於：法政大学市ケ谷キャンパス

日　程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第 1 回 2011.4.27（水）	楊　偉 四川外語学院日本学研究所所長、日本学研究所外国人客員研究員	中国における日本文学史研究の新展開―王健宜氏『日本近現代文学史』をテキストに―
第 2 回 2011.5.25（水）	陳　毅立 法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	中国における思想史研究の方法論に関する思索―『日本近現代思想史』を媒介に―
第 3 回 2011.6.29（水）	王　雪萍 東京大学教養学部講師（専任）、法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	中国における近現代日中関係研究の発展と限界―最新日本研究成果『日本近現代対華関係史』を通じて―
第 4 回 2011.7.27（水）	馬場　公彦 株式会社岩波書店編集局副部長	対日警戒論の歴史的脈絡をたどる―米慶余『日本近現代外交史』を読む―
第 5 回 2011.8.3（水）	郭　勇 大連民族学院講師、法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	中国研究者から見た日本経済の歩み―楊棟樑著『日本近現代経済史』の査読を通じて―
第 6 回 2011.9.28（水）	及川　淳子 法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	日本政治研究の視座を考察する―王振鎖・徐万勝『日本近現代政治史』を読む―
●国際シンポジウム 2011.10.21-25 （金－火）	中国・四川外国語学院との共催 日中両国の研究者による報告	地域研究としての日本学―学際的な視点から―

日　程	報告者（敬称略）／肩書き	テーマ
第 7 回 2011.10.26（水）	李　潤沢 法政大学国際日本学研究所客員学術研究員	国家体制を支える制度としての「家」―『日本近現代社会史』を媒介に―
第 8 回 2011.11.30（水）	川邉　雄大 二松学舎大学非常勤講師、沖縄文化研究所国内研究員	日本近代美術史に関する一考察―彭修銀『日本近現代絵画史』を媒介として―
第 9 回 2011.12.7（水）	姜　克実 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授	中国学界における日本文化論
第 10 回 2012.1.11（水）	劉　迪 杏林大学総合政策学部准教授	日本研究の可能性―臧佩紅氏『日本近現代教育史』を媒介に―
●中国人民外交学会・一般財団法人ニッポンドットコム・法政大学国際日本学研究所共催国際シンポジウム 2012.3.15（木）	小倉和夫（前国際交流基金理事長） 王敏（法政大学教授） 宮一穂（ニッポンドットコム副編集長・京都精華大学教授） 原野城治（ニッポンドットコム代表理事） 趙啓正（中国人民政治協商会議外事委員会主任） 黄星原（中国人民外交学会副会長） 周秉徳（周恩来総理の姪・前中国人民政治協商会議委員）	中日公共外交・文化外交の互恵関係深化の総合的討論
●法政大学サステイナビリティ研究教育機構・国際日本学研究所共催国際シンポジウム 2012.3.20（火・祝）	熊田泰章（法政大学国際文化学部教授） 大倉季久（桃山学院大学社会学部講師） 吉野馨子（法政大学サステイナビリティ研究教育機構准教授） 関いずみ（東海大学海洋学部准教授） 杉井ギサブロー（映像作家） 張怡香（アメリカ米中連合大学学長、ハワイ大学医学院院長、教授） 雷剛（重慶出版社編集部） 賈蕙萱（北京大学元教授） 金容煥（韓国倫理教育学会会長、忠北大学教授） 岡村民夫（法政大学国際文化学部教授） 王敏（法政大学国際日本学研究所教授）	震災後のいま問いかける
特別研究会 2012.3.21（水）	張怡香（アメリカ米中連合大学学長、ハワイ大学医学院院長、教授） 雷剛（重慶出版社編集部） 賈蕙萱（北京大学元教授） 金容煥（韓国倫理教育学会会長、忠北大学教授） 王敏（法政大学国際日本学研究所教授）	変化の中の日本観―東アジア同志の対話―

注 1.　大型国際シンポジウムが国際交流基金の助成を受けて四川外国語学院との共催で中国・重慶にある四川外国語学院にて開催された。
注 2.　国際シンポジウムが日中国交正常化 40 周年を記念し、中国人民外交学会・一般財団法人ニッポンドットコムと共催で北京の中国人民外交学会にて開催された。
注 3.　大型国際シンポジウムが国際交流基金の助成を受けて法政大学サステイナビリティ研究教育機構との共催で法政大学市ケ谷キャンパスにて開催された。

以上の活動にリンクして中国で開催した〈中国における日本研究の「開拓者」会議〉への招聘参加も記録しておくべき研究活動である。

2011 年 4 月 12 日、北京大学において「新中国の日本史研究における基礎時代の開拓者たち―1950 年代以来の中国における日本史研究の歩み、成果、経験」と題した学術シンポジウムが開催された。

このシンポジウムは、中国日本史学会の協力のもとに、北京大学アジア太平洋研究院、および日本研究センター、南開大学日本研究院と復旦大学日本研究センターが共同で開催したものである。参加者は中国全土から集った 30 余名の〈日本研究の開拓者〉にあたる研究者である。

シンポジウムの主旨は、中国の建国（1949 年）以来約 60 年に及ぶ歴史の中で、日本研究に貢献した「開拓者」たちによる回顧から、今後の研究の発展を展望するというものであった。外国への参加者招聘は本研究所のみであった。

・シンポジウムの報告概要

北京大学李玉教授によるシンポジウムの総括録では、報告と議論について以下のように紹介されている。

中国における日本史研究の基礎を築いた人物たち、周一良、呉廷璆、鄒有恒など「三名の長老」が率いた「開拓者たち」が築いた先駆者としての苦難に満ちた歩みを回顧することにより、新中国成立以後、および改革開放以後の中国における日本史研究において、それぞれの段階での発展過程が存在していたことや、学術思想も変遷したこと、研究の特色や時代を象徴するような研究成果があったこと等を総括することができ、それぞれの研究者がどのように日本史研究に従事したかという経験や教学の心得などの経験について交流することができる。

研究者たちは、今後の日本史研究の方向性、方法、重点的な課題をめぐって、熱心に討論を展開し、数多くの意見が提起された。例えば、中国社会科学院の湯重南研究員、天津社会科学院の王金林研究員、復旦大学教授の趙建民教授らの意見は、次のとおりである。中国の研究者が 13 巻にも及ぶ『東アジアの中の日本歴史』研究叢書を日本の六興出版社（1988-1990）から刊行したことや、2010 年では 10 巻本の『日本現代化歴程研究』を中国の世界知識出版社から刊

行したことからわかるように、中国研究者の日本史研究は、専門的な分野や重要な歴史的課題について、総合的かつ体系的な研究能力を示している。

天津社会科学院の呂万和研究員によれば、中国における日本史研究の発展は、その一歩一歩の歩みが、思想の解放や、枠組みの打破と密接な関係を有しているという。そのため、研究理論を絶えず新しいものへと追求していくことによって、日本史研究は活力を維持することが可能となるという観点を発表した。

北京大学の沈仁安教授によれば、中国は国際的な地位の向上にともない、中国の特色ある日本学研究を体系化していくことが、国際的な日本学研究の領域における中国の発言権を高めていくことと連動されているという。中国社会科学院の劉天純研究員は、グローバル化時代の日本史研究では、さらに広い視野を開くことによって、新たな研究分野、研究課題を開拓する必要があるという意見を発表した。例えば、時代に即した研究テーマとして、日本の災害史、環境史、国境変遷史、海洋史などの研究課題に取り組むことも可能となるという。

・アプローチ③から見た同会議の意義

日本研究の大国である中国では、1950年代の冷戦と1960年代の文化大革命、1972年の日中国交正常化、1978年の日中友好条約の締結など国内外の節目を経て、1978年以来の改革開放のもとで、日本研究は再スタートし、かつてないほど活況を呈した。

中でも注目すべきは、新中国が建国されて以来約60年間、日本研究に携わってきた「開拓者」の位置づけである。シンポジウムでは次のように紹介された。日本研究の開拓者たちは、中国の日本史研究において確固たる基礎を固め、今日の中国における日本史研究の生き生きとした繁栄をもたらした。

新たな時代の日本研究という重責を担う現代の研究者にとって、開拓者たちの学術思想、教学の経験、勉学向上の精神で基盤となる研究業績を打ち立てたことは、貴重な精神的財産であり、それらを総括し、継承し、さらに発揚すべきである。新時代の日本史研究に関する開拓者たちの知的蓄積は、後学の者が真摯に学び、中国における日本史研究の発展と深化を推進することは、

この会議の開催目的でもあった。

1978 年以来、改革開放政策を進める中国では、「接軌」（世界のレールに繋ぐという意味）という新語に象徴されるように、世界基準にあわせていこうという姿勢に変わりつつある。そのような趨勢の中で、日本研究の成果でも、斬新な視点・論点を示唆するものが多かった。このように、中国における日本研究は、さらなる発展に向かって開拓者に牽引されて邁進し、今後も中国の参照枠となる研究成果が期待される。

2. 2011 年度で開催した国際会議の中で、以下の二件を特筆しておく。

・ 2012.3.15（木）、北京にある中国人民外交学会・国家行政学院・一般財団法人ニッポンドットコム・法政大学国際日本学研究所共催国際シンポジウム：「中日公共外交・文化外交の互恵関係深化の総合的討論」である。

・ 2012.3.20（火・祝）、法政大学サステイナビリティ研究教育機構・国際日本学研究所共催国際シンポジウム：「震災後の今に問いかける」である。なお、同会議は国際交流基金の支援を受けて開催した。

これら 2 件の国際会議の開催の意義と成果は以下の通りである。

(1)「中日公共外交・文化外交の互恵関係深化の総合的討論」

2012 年 3 月 15 日、日中国交正常化 40 周年を記念し、北京の中国人民外交学会で、「中日公共外交・文化外交の互恵関係深化の総合的討論」をテーマにした日中間共同のパブリックディプロマシー（公共外交）に関するワークショップが開催された。

同会議は、法政大学国際日本学研究所アジア・中国研究チーム（アプローチ③）、中国人民外交学会、国家行政学院及び一般財団法人ニッポンドットコムの三者共催により開催した。日本側からは小倉和夫前国際交流基金理事長、王敏法政大学教授、ニッポンドットコムの宮一穂副編集長（京都精華大学教授）、原野城治代表理事らが参加した。中国側からは、中国人民政治協商会議外事委員会主任委員の趙啓正主任、中国人民外交学会の黄星原副会長、周恩来総理の姪で前中国人民政治協商会議委員の周秉徳氏、経済界の重鎮汪海波

氏らが出席した。

相互の認識と理解が連動している現在、日中双方ともさらなる理解と互恵関係を深めていく必要がある大前提のもとで、建設的な提言が行われた。

日本側代表の小倉氏は基調講演で、日本の公共外交、文化外交、国際交流の進展が内外の状況変化に応じて大きく四つのプロセス（1950 ～ 60 年代「平和な日本」、1970 年代「経済日本への理解」、1980 年代「文化協力」、1990 年代以降「共通の価値観」）を経たと指摘した。また、日中相互理解への提言として、今後の日中関係を考えるにあたり、政治面では日中関係を過去から解放するには、中国人の考え方、苦しみ、損失に対して深い理解が必須であることが指摘された。「公共」文化の時代における課題として、今後の課題は文化的な日中共同制作、共同公演、共同研究を進めることの必要性や、日中友好団体が民間外交や文化外交の中で、その役割を再定義すべきことが示された。さらに、周恩来総理がフランスに留学した際学んだ民族主義、個人主義の国際化、国際主義が示唆しているように、地域の文化を世界に広めることで、その文化は同時に世界の共通の財産にもなっているはずである。このような認識を踏まえた上での文化交流であり、文化外交でもあるため、この点を間違うと文化政策は根本から誤ってしまうという。

中国側代表の趙主任は、公共外交（パブリックディプロマシー）の定意について米国と中国、日本の間には相違があるとしながらも、「中国国民の国際意識の向上を図らなければならない」として、中日関係の改善のために特に公共外交、民間外交の重要性を強調した。また、「中日政府はいずれも世論の影響を受けやすい」、「中日関係の複雑性は米国の存在によるところが大きい」、「近年の調査によると、中日双方の国民が相手国に対する好感度が低い」という三つの側面から中日間における公共外交を重視すべき理由を分析した。さらに、福島原発事故の教訓から中日関係の新たな可能性を探る必要性を提起し、災害の教訓を共有して中日の新しい協力体制を構築しなければならないと述べた。

綜合討論では小倉和夫氏と趙啓正氏を中心に日中双方に内在する相互認識の二重性の問題などについて活発な議論が行われた。

小倉氏は中国の「国連安保理常任理事国と開発途上国」という立場の二重

性を指摘する一方で、日本は歴史という垂直的な思考が苦手で、「過去を簡単に否定できない」という問題を抱えていると強調した。また、戦後のドイツと日本の過去に対する捉え方についても言及し、曖昧さがどうしても残ることを指摘し、それを含めた相互対話の重要性を唱えた。

趙氏は、経済大国と途上国という二つの側面を持つ中国の立場を認めた上で、「中国国民から政府に対する批判、不満がある」ことも考慮し、中国政府は国際的な要求と世論の動向を踏まえ慎重に対処していると述べた。また、趙氏は中日関係について、「盆栽のようなもので水をかけなくてはだめだが、かけすぎてもだめだ」と述べ、中日双方にまだ十分な相互理解がないがゆえに、ゆっくりと慎重に関係を構築していく必要性を強調した。

今回の開催はこれまでの日中対話の範囲を超えるほど展開されてきた。中国、東アジア研究チームにとっても収穫数多く得られた。その中でも、とりわけ以下二点意義深いものであった。

①国家間相互認識の対象が国民多数に設定される場合、基準または認識を共有できる範囲が広いほど望ましい。そのために公共教養、公共意識、公共教育の共有が可能な限り求められている。「共有」を目指して行動する過程において、公共外交の効果がすでに無意識のうちに発揮されていると考えられる。よって、公共外交の意識と役割について今後一層の自覚と実践が期待されよう。

②文化外交はもはやある地域を中心とする文化の発信と交流を交差させる役割を越え、グローバル的な多国間の相互浸透、相互中心、相互学習、相互発展、相互互恵を目標とする方向へ転換しつつある。

(2)「震災後のいま問いかける」

東日本大震災から1年が経った2012年3月20日、法政大学国際日本学研究所と法政大学サステイナビリティ研究教育機構の共催による国際シンポジウム「震災後のいま問いかける」が市ケ谷キャンパスで開催された。

午前の部では、震災後の日本社会が直面している復興に関する提言を中心に議論が行われ、午後の部は国際交流基金の支援を受けて、震災当時から続く日本国民の〈秩序ある〉対応と復興精神に対する世界からの問いかけを切り

口に、「なぜ、『雨ニモマケズ』が読まれるのか」という視点から議論が行われた。いずれの議論も、震災後の復興を支援する試みという点で一貫するものであった。

東日本大震災後、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が再び注目されている。未曾有の災害を経験し人間の無力さに打ちひしがれながらも、人々は、立ち上がり、前を見つめて歩きだすための力強い「言葉」を求めている。賢治が生きた大正・昭和と現代社会では、生活様式だけでなく人々の感性も大きく異なるが、時代が変わり、自然災害の規模が違っても、人間と自然との関わり方は不変である。大震災の経験から私たちが学ぶべきは、人間が自然を克服しようとする現代文明のあり方に疑問を投げかけ、復興とは、同時に自然との関わり方を再考する歩みでなければならない。

人間はどのように自然との関わり方を考えてきたかという精神の遍歴を、日本をはじめとする各国の歴史的、文化的な取り組みを通してお互いに学ぶことにより、その体験知を人類共有の智恵へと高めていきたい。そこで、このシンポジウムは、東日本大震災後の社会の動きを継続的に観察する中で、被災者や支援者が宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を再評価しているという報道が多いことに注目し、前述の世界からの問いかけへの対応の一つとして、各国の代表者によって人類発展史、文明史に貢献できる「受難の教訓と知恵」を浮かび上がらせることが目指された。

取り上げられている宮沢賢治の作品を媒介に、戦後日本の経済発展の過程における自然と人間の原風景ともいうべき関係性に含まれる変容した、あるいは不変な要素を考察した。さらに、そこから抽出した教訓を未来の価値基準にも注入できる可能性を検証した。

東日本大震災の体験を賢治が示した原風景への転換として捉えるならば、人間にとっても生き方の転換が求められ、素朴で原初的価値観の蘇生へと繋がっていくだろう。自然との融合という普遍的な価値の可能性については、日本だけでなくアジアに広く共通する「哲学」や「思想」でもある。

被災地東北出身の宮沢賢治の「雨ニモマケズ」に内在する示唆的な生き方を語ることを通じて、震災からの復興における精神力が、地球規模の生態変化の中で、持続可能な発展を試みる社会への応答とも捉えられよう。これは、

日本人にとっては新たな自己認識を踏まえた上での復興となるだけでなく、外国にとっても自他再認識の機会であり、日本を生き方転換のテストエリアと意識することになろう。その意味で、新たな文明創出の道筋を、海外から招いた著名なゲストたちと共に探り、その体験と知恵を共有できるシンポジウムの開催ができたと考える。

【研究成果】

2011 年度には、以下の研究成果が刊行された。

1. 日本語

・『辛亥革命与留日学生～記念辛亥革命 100 周年学術検討論文集』中国・武漢大学、2011 年 9 月
・『第四届「東方外交史」論文集（下)』中国・西南大学、2011 年 10 月
・『地域研究としての日本学―学際的な視点から』中国・四川外国語学院、2011 年 10 月
・『中国の公共外交』三和書籍、2011 年 12 月
・『辛亥革命と中国人留学生』法政大学、2011 年 11 月
・国際日本学研究叢書 15『地域研究のための日本研究　中国、東アジアにおける人文交流を中心に』法政大学国際日本学研究所、2012 年 3 月

2. 中国語

・『留学と辛亥革命・第二回中国留学文化国際学術研究会論文集』欧米同学会・中国留学聯誼会・澳門基金会、2011 年 8 月
・『西南地域における日本学の構築―日本学研究の方法論と実践を中心に』重慶出版社、2011 年 8 月
・『辛亥革命と世界・記念辛亥革命百周年国際学術討論会論文集』北京大学、2011 年 10 月

3. 英語

・“The East Asian Cultural Research Team of the Research Center for

International Japanese Studies at Hosei University（法政大学国际日本学研究所东亚文化研究课题组）” 英文学会誌 *Journal of Cultural Interaction in East Asia,* Vol.3（電子化公開：http://www.sciea.org/japan/publishing03.html）

4. 法政大学国際日本学研究センター・研究所の発刊による『国際日本学研究叢書 15　地域発展のための日本研究』目次

総　論　東アジアの変化と日本研究に求められる対応―「日本意識」の現在
王　敏

第一部　中国、東アジアにおける日本研究の現在

＊台湾における日本観の交錯―族群と歴史の複雑性の視覚から
黄　智慧（鈴木洋平・森田健嗣訳）

＊香港における日中関係研究　呉　偉明

＊台湾から見た日本の軌跡　吉川　由紀枝

＊憧憬と自意識と―長崎における江戸文人太田南畝の中国意識を例に
小林　ふみ子

第二部　日本の企業文化と日本語教育の現在

＊中日間経済合作における文化摩擦に関する研究―教育現場における日本企業文化への理解のため　劉　俊民　許　恵玉

＊日本語での非対面型ビジネスビジネスコミュニケーションについて―異文化環境に適した人材育成のために　郭　勇

＊中国における多文化共生教育としての年少者日本語教育の試み
山田　泉

＊中日の経済協力関係―現状、課題及び展望　張　季風

第三部　人文交流の現状に対する提言（一）大連の地域性を活性化するためのアプローチ

＊中国における二宮尊徳思想の実践研究の展開と意義―大連を中心に
秦　頴

＊近代日本文人と大連―夏目漱石、中島敦、清岡卓行を例に　劉　振生

＊清岡卓行と大連　藤村　耕治

＊日中文化交流の昔と今―文化異同と異文化理解のために　王　秀文

第四部　人文交流の現状に対する提言（二）体験文化の知恵と教訓を生かしていく

＊日中の広告表現の比較　福田　敏彦

＊日本文学研究会創立当時の思い出　呂　元明（劉春英・呉佩軍訳）

＊羊・馬・蛇の象徴精神―現代中国人の動物観を「参照枠」に　王　敏

おわりに　歴史的・文化的差異と相互理解　王　敏

今後の研究課題と問題意識：

東アジアでは共通の文化素養を持ちながらも、一方それぞれの地域の変遷は、精神遍歴と体験知が異なるため、普遍的と思われている文化面においても発展段階により相違があることに気が付く。これらの相違はたとえ国境を越えた共有の利益に向かう場合でも、しばしば相互認識の弊害と化し、摩擦の要素になってしまう。この課題を乗り越えるため、共通の文化素養と価値基準を再認識させる必要がある一方、異なる部分の輪郭を明瞭に浮かばせてくるのも重要な参考と思われる。特に欧米価値基準の教養体質になりきった戦後日本の「風土」にとって、中国と東アジアの日本意識を知る過程は自己認識と改革の良性循環であり、東アジア諸国との相互理解、相互認識、相互学習、相互発展を求められる入口であろう。それにつながると思われる研究活動を通して同研究の目的を検証してきた。そこから時代に求められている東アジア諸国間に、日中間に横亘っている地域型応対への通路が少しずつ見えてきた。

参考資料

・法政大学国際日本学研究センター・研究所ホームページ：2011 年度活動記録
・法政大学国際日本学研究センター・研究所編：『ニューズレター 15 号』、『ニューズレター 16 号』

研究アプローチ④「＜日本意識＞の三角測量ー未来へ」

アプローチ・リーダー：安孫子　信

2011 年度研究アプローチ④の活動は、3 回の国際シンポジウムの開催と 3 回の勉強会の実施、ならびに論集 1 冊の出版ということでまとめられる。まず活動の一覧を掲げたい。

【国際シンポジウムの開催】

(1) 法政大学シンポジウム「日本の国家アイデンティティの形成と‘土着性’の問題」

月　日：2011 年 10 月 2 日（日）

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス ボアソナード・タワー 26 階 スカイホール

共　催：このシンポジウムは「アジア・フランコフォン大学」（9 月 29 日～10 月 1 日：日仏会館）への協賛企画としてフランス大使館との共催で、またパリ INALCO、中央大学からの協力を得て開催された。

(2) アルザスシンポジウム「日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの」

月　日：2011 年 11 月 4 日（金）～ 11 月 6 日（日）

会　場：アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）

共　催：法政大学国際日本学研究所（HIJAS）／フランス国立科学センター東アジア文明研究所（CRCAO）／ストラスブール大学人文科学部日本学科／アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）

(3) 大連民族学院／法政大学シンポジウム「参照枠としての中国と＜日本意識＞」

月　日：2011 年 12 月 16 日（金）～ 17 日（土）

会　場：大連民族学院国際言語文化研究センター

共　催：大連民族学院国際言語文化研究センター／法政大学国際日本学研究所

【勉強会の実施】

(1) 第1回勉強会「日本哲学へのベルクソンの影響―西田幾多郎と九鬼周造の場合」

報告者：アルノー・フランソワ（トゥールーズ第2大学講師）

日　時：2011年6月23日（木）18：30～20：40

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

司　会：安孫子　信（法政大学国際日本学研究所所長・文学部教授）

(2) 第2回勉強会「キルヘル・ケンペル・シーボルトが描く日本の仏像」

報告者：ジョセフ・キブルツ（法政大学国際日本学研究所客員所員、フランス国立科学研究センター教授）

日　時：2011年11月25日（金）17：00～19：00

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

司　会：安孫子　信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

(3) 第3回勉強会「20世紀前半ドイツにおける日本文学と日本神話の受容について」

報告者：ユディット・アロカイ（ハイデルベルク大学日本語学科教授）

日　時：2011年12月19日（月）18：30～20：30

会　場：法政大学市ケ谷キャンパス58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

司　会：安孫子　信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

【論集の発行】

(1) 国際日本学研究叢書16

『2010年アルザス・シンポジウム報告：日本のアイデンティティ―形成と反響』

編　集：法政大学国際日本学研究所

発　行：法政大学国際日本学研究センター

以下では国際シンポジウムを中心にして、それぞれの内容と意義について触れながら、一年間の研究成果を振り返っていきたい。

(1) 法政大学シンポジウム「日本の国家アイデンティティの形成と‘土着性’の問題」

文字通りに「その地に生まれた」を意味する「土着性（オートクトニー）」という語はギリシャ思想の鍵概念であり、後にフランス語の中にも導入されていくが、マルセル・デチエンヌの分析によれば、この語こそが西洋における「国家アイデンティティ」構築の基礎となったものである。この土着性の概念は、日本の国家アイデンティティを考える際にも有効であろうか。この問いかけを軸に、シンポジウムでは、比較の観点から、デチエンヌが明らかにしてきた国家アイデンティティ形成のメカニズムと、日本における各時代のアイデンティティ形成の実際との重ね合わせが試みられた。

当日の報告者は、発表順に、マルセル・デチエンヌ（ジョンズ・ホプキンス大学）、ヨーゼフ・クライナー（法政大学）、アラン・ロシェ（EPHE〔国立高等研究院〕）、渡辺浩（法政大学）、フランソワ・マセ（INALCO〔国立東洋文化研究所〕）、星野勉（法政大学）の6氏で司会は安孫子信（法政大学）が務めた。

まずデチエンヌ報告「国家アイデンティティの形成と土着性の変遷」では、古代ギリシャのアテネで生まれた土着性概念が、当初からイデオロギーとして自国民の純粋性を称揚し他国民の雑種性を蔑む政治的意味合いを有しており、戦死者を弔い自国史を語るといった擬制にも伴われて、その後も世界各所で養分を与えられ続けていった過程が示された。

続くクライナー報告「日本民族・文化の多様性」では、日本の民族的・文化的土着性が文化人類学的視点から批判的に吟味され、それが決して純粋一途なものではなく、日本で土着のものとして言えば、二民族（大和民族、アイヌ民族）、三文化（日本本土文化、沖縄文化、アイヌ文化）を数えうることが示された。

またロシェ報告「日本神話における天の主権と土着者たち」では、古事記や日本書紀の国家の起源を扱う神話部分で、国家発祥の地である大和は神武天皇によって土着民から勝ち取られたものであると明記されていることから、日本の国家アイデンティティの核に土着性が持ち込まれていないこと、しかし土着民は階層化されて、主権がその地で確立され正当化されていく中で、主権のいわば引き立て役としてさまざまに取り入れられていったことが示された。

さらに、渡辺報告「この「国」の起源―本居宣長の思想とその影響」では、明治天皇制国家に結実していく国家アイデンティティ思想が、土着性に根付くということを超えて、国土自身を生みだした神々の子孫が今も天皇として統治し、当初からの臣民の子孫が今でも臣民として服しているという、独自の歴史観に基づくものであることが示された。その一方で、このような思想が、江戸時代に、儒教を掲げる当時の中国中心主義への反発から本居宣長によって構想されたものであり、それが明治期に、今度は西洋社会におけるキリスト教に代わるべきものとして伊藤博文によって採用されていったという、いわば外発的な形成物であることも指摘された。

さらに、マセ報告「山鹿素行『中朝事実』における中華思想の乗り越え」では、江戸時代、中国儒教による日本社会の支配への反発から、本居に先だって、山鹿素行がまず、「儒教思想が生まれたのは中国ではなく日本であり、皇統の最初期にすでに徳治が実現されていた」と主張していたこと、しかし、その主張では、中国儒教の徳治はモデルとして維持されており、しかも政治の実権からは天皇が全く遠ざけられた中でそれが主張されたという矛盾が生じていたことも指摘された。

最後に、星野報告「和辻の日本古代文化論における倫理意識の原型」では、和辻が、日本文化が一つの周辺文化として大陸中国からの文化移入に依存しつつも、移入物を独自に開花させていった力を優れた内在の力とみなして評価したこと、その内在の力の核にあるものを清明心として認め、それは天皇を崇拝する心と重なるものであると主張したことを紹介しつつ、そのような和辻に対しては、「清明心と天皇制との結びつきを律令制当初から言うことはできない、その結びつきは、天皇が政治的実権を失っていった中世以降のことに過ぎない」と主張する批判があることにも、同時に言及がなされた。

こうして、デチエンヌのモデルを念頭に置きつつ、日本のアイデンティティの主張の内実が、古代（ロシェ）、江戸時代（マセ、渡辺）、明治（星野）、現代（クライナー）のそれぞれで検討されていった。結果として、デティエンヌのモデルに反して、日本では、アイデンティティを言うために純粋に土着性をそれとして称揚するケースは歴史的に見当たらない、と言いえよう。ただし、日本の国家思想は大方どれもが、天皇・天皇制を軸にしており、土着性を言わ

ないとしても、純粋性と何らかの歴史的永続性の主張を含むものであることは確かである。しかも、そのどれもが、外国との対抗心を陰に陽に前提にしており、外国文化にある種の雑種性を見てそれを蔑視しようという傾向も有するのであった。そうであるから、文化人類学の立場からのクライナー報告が、日本でもしも本当に‘土着性’を言うとすれば、それは民族的にも文化的にも雑種的で複線的なものとして示されることになろう、と論じえていたことが注目されたのである。

(2) アルザスシンポジウム「日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの」

1　シンポジウムの概要

CEEJA での恒例の国際日本学シンポジウムでは毎年統一の主題の下で報告が行われる。本年度の主題は「日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの」であった。日本人が、また外国人が、日本文化のアイデンティティを示すと見なしてきた様々な＜象徴＞が広く問題とされた。＜象徴＞を介することで、日本や日本文化のアイデンティティについて、それらがそれとして存在するものなのか、それとも、ただ作り出されたものなのかが、日本の歴史、社会を背景に様々に問われていった。

シンポジウムでは、日本側から 10 名、欧州側から 8 名の計 18 名が以下の報告を行った。

①ウルリッヒ・ハインツェ（セインズベリー日本芸術研究所）の報告「アイデンティティを掘り出す―現代日本における過去のシンボル」では、日本人個々の「自己アイデンティティ」が＜自己主張＞という形ではなく、過去を深く掘り起こすことでの＜自分探し＞に向かっている様子が、マンガやアニメにも言及しながら検討された。

②ギョーム・カレ（フランス国立社会科学高等研究院〔EHESS〕）の報告「神功皇后神話盛衰記―ある『日本国家のイメージ』の運命」では、明治初頭に「軍国日本の象徴」として喧伝されたものの、第二次世界大戦後はタブー視されることになる神功皇后と三韓征伐の神話を通して、日本という国の自己表象の変遷が辿られた。

③アラン・ロシェ（フランス国立高等研究院〔EPHE〕）の報告「神話とイデオロギ―誤解の系譜」では、それ自身作られたテキストでしかなかったものが、国学の文献学的精査を受けて建国の「神話」とされ、それがさらに再解釈されて、国家アイデンティティを支えるイデオロギーへと化していく記紀神話成立の過程が、詳しく検討された。

④ロバート・ボーゲン（カリフォルニア大学デービス校）の報告「道真の和歌―その紛らわしさ」では、菅原道真の和歌が彼自身の漢詩との対比で検討され、そこに中国的な知識と教養が色濃く影を落としてはいるものの、日本的な心性からの風物や事柄の描写が自ずから散りばめられていて、和魂漢才といった様相を呈していること、すなわち和歌創作において菅原道真には、日本的要素と中国的要素とのせめぎ合いが見られることが明らかにされた。

⑤クリスティアーヌ・セギー（ストラスブール大学）の報告「矛盾的英雄の象徴としての西郷隆盛の肖像」では、「維新の最大の功労者」であるとともに「最後の武士」でもある西郷隆盛を対象に、一時は「明治政府の敵」であった西郷が、やがては「敬天愛人」の英雄に祭り上げられていくその過程で、絵画や銅像などでの彼の描かれ方がどのように変遷していったかが検討された。

⑥川田順造（HIJAS）の報告「日本人の自死に見る道徳観と美意識―切腹、殉死、心中死」では、日本文化における自死のあり方が検討され、「死の方法」と社会階層とが結び付いていることが明らかにされるとともに、日本独特の現象とされる切腹、殉死、相愛男女の心中について、それらが倫理的また美学的などのような諸要素の結びつきの結果であるのかが、明らかにされた。

⑦マヤ・ミルシンスキー（リュブリャナ大学）の報告「自死―日本とスロベニアの比較文化論」では、2000年代に入って自殺率が増加している日本と比べて、経済的・社会的状況が日本よりもさらに悪い国（スロベニア）における自殺率が日本よりも低いことが指摘され、「経済的・社会的な状況の悪化が日本の自殺率の高さの原因」であるという通説の問題点が明らかにされた。

⑧ヨーゼフ・クライナー（HIJAS）の報告「日本民族・文化の定義づけとしての稲作文化」では、実際は世界各地で広く行われているにもかかわらず、稲

作文化が、日本民族･日本文化の定義づけにしばしば用いられる点に注目し、民俗学・民族学における「日本の稲作文化」論の特徴はどこにあるのかが、総説的に示された。

⑨内原英聡（HIJAS）の報告「象徴としてのリョングブン（霊供盆）―八重山の人々の信仰と世界観」では、沖縄・八重山地方において、信仰の象徴として法要の際に供される伝統的料理の霊供盆について、時代の変化を通してそれが変わっていった点と変わらずに残っていった点とが詳しく検討され、八重山地方における「祈りの性質の変化」が明らかにされた。

⑩合田正人（明治大学）の報告「〈沖縄学の祖〉伊波普猷と明治期の人文学」では、「沖縄学の祖」とされる伊波普猷の仕事の検討を通して、日本本土との関係において、琉球・沖縄の人々が自らをどのように位置づけ、どのように理解したと考えうるかが、同一性・多様性・差異性といった概念から検討された

⑪ジョセフ･キブルツ（CRCAO）の報告「国民のあかし「伊勢大麻」」では､「江戸時代における ID カード」であり、太平洋戦争中には内地の世帯の 96％が所有したともされる伊勢大麻が検討され、日常的で素朴な信仰のあり方が「日本人らしさ」あるいは「日本人であること」と密接に結びついていることが明らかされた。

⑫星野勉（HIJAS）の報告「国民統合の〈象徴〉としての天皇とは？」では、太平洋戦争後、人間宣言や新憲法の施行によってそれまでの現人神から「国民統合の象徴」となった天皇に関する和辻哲郎と津田左右吉の議論の検討を通して、大正デモクラシーに淵源する国民主義的な天皇不親政論がどのように戦後まで引き継がていったかが、明らかにされた。

⑬鈴村裕輔（HIJAS）の報告「国体は自由主義の原理である―戦前期における石橋湛山の議論を中心に」では、戦前の日本で、政党政治の排除や軍部の政治介入の根拠とされた「国体」概念が、石橋湛山の立場から、すなわち、明治維新の精神を「万機公論に決すべし」という五箇条の誓文に求めて「日本の国体は一党独裁ではなく民主政治にある」とする彼の立場から、改めて検討された。

⑭安孫子信（HIJAS）の報告「『軍人勅諭』と西周」では、徴兵制度によって

成り立つことになった明治新政府の軍隊に「天皇の軍隊」という特別な地位を与えることになった「軍人勅諭」の、西周による当初原案の文章と、最終的に公布された文章とが対比検討され、西の啓蒙的で功利主義的な天皇観が、権威主義的で国粋主義的な内容にどのように変形、変質されていったのかが、提示された。

⑮マリア・エウヘニア・デ・ラ・ニュエス（ボルドー大学）の報告「アイデンティティ、伝統、現代性：エドモンド・アブーの *La Grèce contemporaine*（1854）とピエール・ロチの *Japoneries d'automne*（1889）におけるフスタネラと着物の研究」では、19 世紀に執筆されたギリシアと日本を描いた二つの旅行文学の作品を通して、衣装を国民的象徴の要素と捉える分析が試みられた。

⑯山中玲子（HIJAS）の報告「能の何が日本的なのか」では、「日本を代表する」という言葉がとかく冠せられる能楽の何が日本的であるのか、いつ頃から幽玄性や象徴性がそれとして追求されるようになったのかといった諸点が、世阿弥の時代からの各種の文献に基づいて実証的に検討された。

⑰大石直記（明治大学）の報告「〈身を投げる女〉の表象―〈世紀転換期〉における再生する古伝承」では、自死の伝承としての「処女塚伝説」の観点から森鴎外の戯曲『生田川』と夏目漱石の小説『草枕』とが分析され、両者が「処女塚伝説」を作品に取り込むことで「利己心を超える他者への想像力」という新しい創造を試みていることが明らかにされた。

⑱相良匡俊（HIJAS）の報告「＜変な外人＞考」では、1960 年代に流行した「変な外人」という表現を手掛かりに、外国人に対する日本人の意識の変化と、そのような変化をもたらした背景とが、大衆文化の側面から検討された。

2　シンポジウムの成果と意義

シンポジウムでは、国際的かつ学際的という国際日本学のそもそもの枠組みに加えて、今回は＜象徴＞を手掛かりに置いたことで、アイデンティティの問題が、文学や思想、芸術といったコアな現象においてばかりでなく、大衆文化や日常生活においてまで幅広く論じられていった。これは問題の検討にきわめて有益であった。すなわち、日本および日本文化のアイデンティティは、こうして雑多な現象を通じて検討されて、単純で純粋なものとしてではなく、

動的で複雑なものとして現れ出ることになったのである。諸発表から言うべきことはしたがって、日本において、アイデンティティは本来的に在るというより、むしろ作られてきたものであって、しかもその形成は、内側から一途にではなく、そのつど、外的状況に応じて、相対的に（悪く言えば、アド・ホックに）なされてきたということである。だからこそ、それは多様で多彩なのである。その形成の実態を歴史的、社会的にさらに精査して、今日、日本のアイデンティティを改めて語るに際しては、アイデンティティを探し求めるというのではなく、アイデンティティを生み出し創るということこそ重視すべきである、といった主張をなし得るように思われたのである。

(3) 大連民族学院／法政大学シンポジウム「参照枠としての中国と＜日本意識＞」

法政大学国際日本学研究所（HIJAS）と大連民族学院国際言語文化研究センターとが共催する合同シンポジウムが、2010年の法政大学での会に続いて、2011年12月に大連民族学院で2日間にわたって開催された。現在HIJASが研究の中心テーマとしている「＜日本意識＞の再検討」にもつながることとして、今回は「参照枠としての中国と＜日本意識＞」が全体テーマとして取り上げられた。日本人また中国人が日本を日本として意識する際に、中国を参照枠として‘中国と比べて日本は’といった仕方でそれを行うことが歴史的に繰り返されてきたのである。その諸例が、法政側7名、大連側6名、合計13名の発表者たちから、時代と領域とを横切って、さまざまに紹介されていった。

まず、古代日本の律令体制を取り上げた発表が3つあった。小口雅史（HIJAS）は、中国からの移入で成立した古代日本の律令体制が、その律令の中で中国をどう処遇しようとしたのかを紹介した（「古代東アジア世界のなかの日本の自国認識」）。井上亘（北京大学）は同じ時代に当の中国がその律令国家日本を実際にはどう見ていたのかについて、そう高く評価していなかったのではないかという視点から発表を行った（「唐からみた古代日本」）。

さらに星野勉（HIJAS）は律令国家日本が有した日本的特質を、和辻哲郎や津田左右吉の仕事に依りつつ紹介した（「思想史から見た和漢律令制の構造差」）。

次に、思想史の事例から論じた発表が４つあった。何長文（大連民族学院）は儒教の日本移入が儒教の哲学的部分を抜き取ってのもので、それが日本人の精神構造そのものの反映であると主張した（「日本における儒教文化の吸収と見失」）。秦穎（大連民族学院）は二宮尊徳思想の戦中中国への移入の問題に触れつつ、それが現在新たな意味を中国でも持ち得ることを主張した（「中国としての二宮尊徳研究の必要性と方法」）。劉俊民（大連民族学院）は「東洋のルソー」とも呼ばれる中江兆民が西洋的である以上に「文人志士」的な中国的思想家であったことを示した（「東洋の伝統から見た兆民の政治意識と行動」）。安孫子信（HIJAS）は明治啓蒙思想の雄で西洋哲学の日本への導入者であった西周が、儒教そして中国へも丁寧な目配りを行っていたことを主張した（「明治啓蒙思想家にとっての中国」）。

文学からの事例を扱った発表が２編あった。王秀文は日本おとぎ話を代表する「桃太郎」の構造分析を行い、とくにモチーフである「桃」と中国文化との関連性を明らかにした（「「桃太郎」の構造」）。小林ふみ子（HIJAS）は江戸時代の「狂詩」作家たちの江戸を謡うイマジネーションの中で、長安や洛陽のイメージがどのように使われたのかを紹介した（「狂詩の描く「やつし長安」としての江戸」）。

最後に教育での日中文化の接触を題材として論じた発表が４つあった。王敏（HIJAS）は清朝末の中国からの法政大学への留学生が、その後の辛亥革命で大きな役割を果たしたことを紹介した（「清国留学生の受け入れ事情をめぐる一考察」）。劉振生（大連民族学院）は「満州国」時代の歴史的産物である「留学生予備校」でかつて学んだ学生たちへ聞き取り調査を行い、政治の教育への複雑な作用を明らかにした（「口述史学による「満州国」留学生予備校への一考察」）。相良匡俊（HIJAS）は日本における音楽・体育教育の草分け的存在であった伊澤修二が同時に、当時の「植民地教育」においても同化主義で独特の役割を果たしたことを紹介した（「植民地教育創始者としての伊澤修二」）。王暁慧（大連民族学院）は法制教育での日中のつながりを古代の律令時代まで遡り論じて、現在それが停滞している理由を指摘した（「日本法制の中国における影響の式微」）。

以上の発表を通じて、＜日本意識＞の成立に、中国が大きくかつ絶対的な

役割をはたして来たことが改めて確認された。今回のシンポジウムから改めてわれわれが知るのはこうして、今日、＜日本意識＞の新たで生産的な在り様を模索するとき、「参照枠としての中国」がやはりそこに動かしがたいものとしてあって、われわれ日本人はまず中国との関係で、新たで明確な位置取りを探し出していかなければならないということであった。

「電子図書館の構築」の現状と課題

小口　雅史

本アプローチでは、当初から、国際日本学研究所のサーバー室に、基幹となるサーバーをはじめとして静止画や動画を大量に蓄積でき、かつそれを高精度に処理できるハードウェアを用意して、インターネットを通じて、研究所での研究成果を世界に双方向的に発信・受信できる体制を整えると共に、能楽研究所・沖縄文化研究所等とも協力して、国際日本学研究にとって国際的に価値あるコンテンツを整備することを目的としている。

戦略的研究基盤形成支援事業を分担する研究アプローチ①～③を上部構造でまとめるのがアプローチ④であるとすれば、本アプローチは、逆に下でそれらを支える役目を担っている。もちろん戦略的研究基盤形成支援事業を支えるだけではなく、本研究所がこれまで成し遂げてきた諸研究の成果に基づくデジタルデータも引き続き維持・増強する役割も担っている。データベースは維持されてこそ意味があるからで、今後もこの方針は貫いていく予定である。

なお本研究所のホームページのコンテンツの情報センターサーバーへの移行にともなって、電子図書館への入口となる URL が変更になったが、データベース本体は従来通り aterui サーバーで稼働している。

2009 年度冒頭の本サーバー・システム大改造時には、旧デジタルライブラリーの所蔵貴重典籍類の写真群を法政大学図書館のリポジトリへ移管した。その際に、沖縄文化研究所所蔵資料を中心に、タイトル名などの不備を全面的に訂正している。その際のデータ数は、国際日本学研究所所蔵資料 41 件、能楽研究所所蔵資料 92 件、沖縄文化

研究所所蔵資料 42 件で、その後、現在に至るまで件数自体に増減はない。

本研究所サーバーにおけるコンテンツとしては、運営開始当初以来、①国際日本学研究に資する、国際日本学研究センターを構成する各研究所 (国際日本学研究所・能楽研究所・沖縄文化研究所) の画像類、②研究成果を統合して国際的に活用してもらうためのデータ類、③国際日本学研究を進展させるための研究成果データベース類、④国際日本学研究者自体のデータベース類、の四つを想定し、そのすべてについて公開作業を実施してきた。

またこれらは研究所のサーバー（OS は Windows Server 2003）のシステムとしては、FileMaker 系のデータベースと、NAMAZU 系のデータベースとに分かれる。大まかに言って、画像を含むもの（将来含む可能性のあるもの）が前者、テキストベースのデータが後者となっている。

コンテンツ①については､かつて日立製作所がサーバー内に設置した “Digital Library” というシステムによって公開してきたが、より利用しやすい形に変更するために、従来公開してきた個別 JPEG 画像を、あらたに高精度を保ったまま典籍毎にまとめることのできる PDF ファイル群に変換して 2009 年中に法政大学図書館サーバー内に設置されたリポジトリに移管済みである。

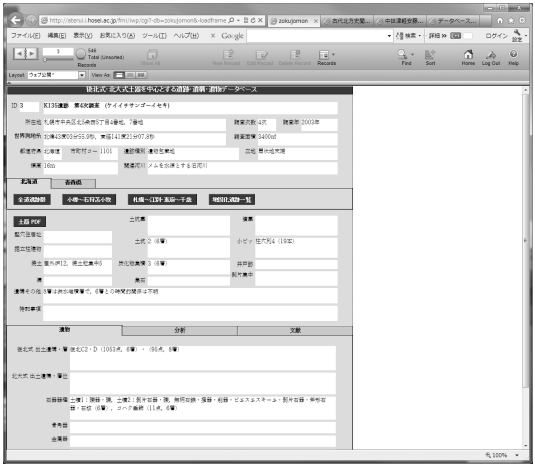
なお能楽研究所所蔵資料については、冒頭部画像付き目録データベースも FileMaker11 をベースに FileMakerServer Advanced11 を用いて別途公開している。

コンテンツ②については、国際研究協力の成果の一つである「在ベルリン・吐魯番漢文世俗文書データベース」を構築、引き続き拡充している（当初の調査資金は小口を代表とする科研費による)。これはベルリン国立図書館やベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー、あるいはベルリン国立アジア美術館などの施設に架蔵されている、中国西域の吐魯番出土の漢文世俗文書断片群を整理して、本来の書名を解明し、さらにはその全文テキストを精細な画像付で公開しようとするものである。これらの文書調査は吐魯番地域と同じく中国律令制を継受した日本古代史とも深い関係を持ち、さらにドイツとの国際的な協力によって成り立ったものである。これまで画像は権利関係の問題があって公開できずにいたが、今回それもクリアされ、全点について新たに鮮明な画像を表示させるシステムとして再構築され運営中である。日中西の「三点測量」

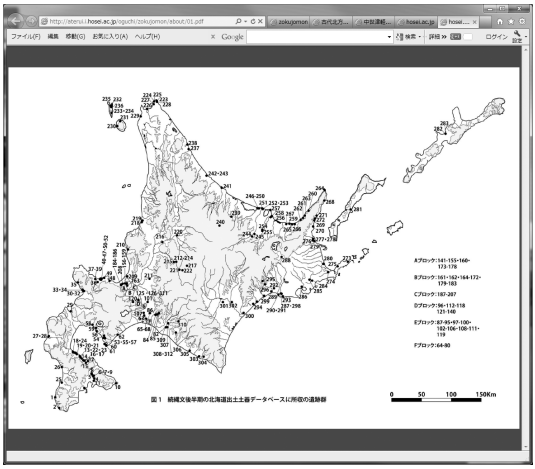
による国際日本学研究のモデルケースとして新システムで公開している。画像が重要な要素になっており、FileMaker ベースで作業がなされている。

現在、登録文書数は 826 点。ただしさらなる拡充のためには、さらに新たな科研費による調査が必要で、現在模索中である。また精密なトレース図や全文デジタルテキストを順次、内部で蓄積している。

コンテンツ③については、国際日本学研究の対象の一つである「日本のなかの異文化」の代表的存在である北方史分野を中心に、弥生時代以降、近世にいたるまでの時代を研究した文献を網羅し、柔軟に検索できるシステムを再構築して、それを世界に向けて公開することによって、国際日本学研究の進展に資することができた。さらにそれを拡充し、およそ日本古代史に関わる全ての研究についてのデータベースの構築にも入り、試験公開に成功し、引き続き拡充している。年度末時点での登録データ数は、古代北方史関係研究文献目録データベースが 20,478 件、中世津軽安藤氏関係研究文献目録データベースが 1,199 件、近世アイヌ史関係研究文献目録データベース［試行版］が 8,626 件、日本古代北方考古学関係研究文献目録データベース［岩手県分･試行版］が 313 件、日本古代史関係研究文献目録データベース［試行版］が 200,341 件である。これらはすべて NAMAZU ベースで作成されている。なお検索のための単語分割には KAKASHI を用いているが、デフォルトの辞書をそのまま使うか、こちらで用意した歴史的専門用語の辞書を使うかで試行錯誤が続いているが、現時点ではデフォルト辞書で運営中である。



また昨年度末には新たに、北方世界特有の土器である続縄文土器の、後期のデータベース「後北式・北大式土器を中心とする遺跡･遺構･遺物データベース」を試験的に公開し始めた（左図参照）。まだ実測図の公開許可を



得る作業が続いているため、土器の図像自体は一般公開できないが（内部的には実装済）、土器に関する詳細なデータは十分に公開することができた。現時点では北海道と青森分546件を公開している。

また遺跡の分布図も作成して研究の便宜を図っている。

さらに内部の共同研究者のために、今年度からNAS（Network　Attached Storage）によるデータの共有を開始した。現時点では主にアプローチ③と本電子図書館システムで利用されているが、大量のデータを電子的にここに保管しておくことによって、いつでも過去の共同研究に遡ることができ、それを踏まえての研究の前進が図られるように工夫されている。

コンテンツ④については、国際日本学研究に従事している研究者のデータベースを構築することによって、世界のどこにどのような分野を対象としている研究が存在するのかを自由に検索できるようにした。これによって新たな国際協力による研究連携が可能になり、国際日本学研究の進展を促進する準備を整えることができた。データ数は昨年と同様で1560件。ただし件数は同じでも一部細かい改編がなされている。このデータベースはFileMakerで作成されている。

なおこれらとは別に、昨年度から3年計画で採択された文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業：欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究点」の調査成果を共有するためのデータベースもメンバー内部限定で公開を開始した。画像を含むのでFileMakerベースで作業している。2012年度末までには一般公開する予定で作業を進めている。